

高齢者の「過去の語り」に関する研究：過去の捉え方・人生満足度との関連

森園， 絵里奈
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15705>

出版情報：九州大学心理学研究. 6, pp.273-280, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

高齢者の「過去の語り」に関する研究

—過去の捉え方・人生満足度との関連—

森園絵里奈 九州大学大学院人間環境学府

A study on the narratives of the past of the elderly —Their relationship to attitudes toward the past and life satisfaction—

Erina Morizono (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this research is to study the narratives of the past of the elderly in relation to their attitudes toward the past and life satisfaction. A scale consisting of 9 questions was developed to measure the frequency of articulation of spontaneous reminiscences in daily life. The sample consisted of 78 elderly people. The results suggest that the elderly who recall their past positively didn't talk about the past frequently, and that negative narratives were told more than positive ones. It was also found that the elderly who recall their past positively tend to be more satisfied with life. These results suggest that there is a meaningful relationship between narratives of the past, attitudes toward the past, and life satisfaction. When understanding the elderly, the frequency and contents of their narratives are valuable sources of reference.

Keywords: the elderly, reminiscence, past, narrative, life satisfaction

1. 問題と目的

1. 回想について

かつて経験したことを再認感情を伴って再生したり、過去について思い巡らす、つまり回想という行為は、老年者に見られる一般的傾向だと思われる。長田・長田(1994)は、これは昔から高齢者が過去に生きようとする傾向があると信じられていたためであろうと述べている。

長嶋(1977)は、高齢者に比較的表れやすい性格傾向として「愚痴」を取り上げ、それを過去の自分や生活に注意が注がれ、現実の自分や生活をきちんと認知できていないためだと説明している。また、黒川(1995)も高齢者の回想は、未来の短縮した高齢者の過去に対する執着や老化のサインとして、否定的心理過程としてみなされてきたという歴史を記している。このように、以前は回想という行為は後ろ向きな、否定的なものとして捉えられる傾向にあった。

近年になって、老年期に過去を振り返ることが、自我機能にとって重要な意味を持つという、回想の積極的な意義が示されてきている。

Butler(1963)は、老年期によく見られる回想は、自己の歩んできた人生を回顧して未解決の葛藤を解決することを促す自然な心的プロセスであり、回想を語り、様々な評価や自己洞察を加えることによって、心理的適応が促進されるとした。Butlerは、高齢者の臨床場面におい

て人生回顧を利用することの重要性を強調し、回想の様々な機能についての可能性を示唆し、今日の回想研究に影響を与えた。

このように、高齢者の回想、つまり「過去を振り返る」という行為について、その意味や影響について様々な議論が行われてきた。今日では、回想を用いて高齢者の心理的適応を促す回想法が普及し、老人施設や医療現場で多く取り入れられ、様々な効果が報告されている(長田・長田, 1994; 野村・橋本, 2001など)。

しかし、未だはっきりとした回想の効果やメカニズムについて明らかにされていない。その理由として、「回想を行う」ことの中に、回想する過去の内容や、回想することに伴う感情などが考慮されていないことなどが挙げられるだろう。回想する過去の内容が肯定的なことか否定的なことか、回想したときにポジティブな感情を抱くか、ネガティブな感情を抱くかなど、一言に「回想」といってもその意味は違ってくるだろう。

そこで、回想という行為をより丁寧に、回想の内容や回想に伴う感情を考慮して改めてその意味や効果を考える必要があると思われる。

2. 語ること

また、これまで言われてきた「回想」には、単に個人の中で「過去を思い浮かべる」場合と、その思い浮かべたことを「他者に語る」ことも含まれる場合の両方があることに注目したい。現在行われている回想の効果研究

(黒川, 1995; 河田・吉村ら, 1998; 松田・黒川ら, 2002 など)は, 主に「回想法」という形で行われており, これらの研究では, 一つのグループで回想し, それを語る高齢者, 語らない高齢者両方を含めて回想法前後の変化を見ている。これまでの研究で効果が示されてきたように, 「回想する」という行為自体に意味があり, それを語るか語らないかというのはまた別の問題といえるかもしれない。ただ, 過去の出来事に限らず「語る」という行為が持つ意味は大きく, 過去を振り返り, その事実や, 振り返ったときに抱く感情を自分の中に閉じ込めておく場合と, 他者に語りその思いを受け止めてもらったり評価を受けたりするのでは, また違った意味や効果を持つと考えられないだろうか。

菅原(1997)の老年期の自己開示の研究で, 高齢者が自己について「語る」とことと心理的適応の関連を報告している。この研究で, 高齢者の自己開示頻度と自尊感情の関連が示されており, 開示頻度が全体的に少ない高齢者は, 開示頻度が多い高齢者と比較して自尊感情が有意に低いということを報告している。また, 語る事柄が肯定的な内容か否定的な内容かによって, 開示頻度や自尊感情の程度が異なるということも報告している。

このように, 高齢者が自己について「語る」ということと心理的適応の関連が示されており, 過去に関してもまた, 単に回想するというのではなく, その回想を他者に語ることでより心理的適応をもたらすという可能性も考えられるだろう。

3. 本研究の目的

そこで, 本研究では, 回想というよりむしろ高齢者の「過去を語る」という行為に注目し, 高齢者が普段どのような過去の出来事を, どのくらいの頻度で他者に語っているのか, また, 過去を語ることが心理的適応にどのように関係しているかを知ることを目的とする。「楽しかった過去」を語って生きる喜びや励みにする, 「苦しかった過去」を語ることで過去を捉え直したり, 苦しかった過去を受け入れることができるようになる, または「苦しかった過去」を自分の中に留めておくことで心理的安定を図るなど, 様々なことが推測されるが, 本研究では以下の仮説を立て, 仮説検証的に検討を行う。

仮説1: 否定的な過去の出来事よりも肯定的な過去の出来事の方が語る頻度が多いのではないだろうか。

仮説2: 過去を語る頻度と過去の捉え方に関連があるのではないだろうか。つまり, 過去を語る頻度が多い高齢者ほど過去を肯定的に捉える程度が大きいのではないだろうか。

仮説3: 過去の捉え方と現在の生活の満足度に関連があるのではないだろうか。つまり, 過去を肯定的に捉えている高齢者ほど現在の生活の満足度が高く,

否定的に捉える高齢者ほど現在の生活の満足度が低いのではないだろうか。

なお, 本研究では, 「過去の語り」=回想した過去の出来事を他者に語ること, 「過去の捉え方」=過去を全体的にどう捉えているかということ, 「人生満足度」=現在の生活の満足度と操作的に定義し, 研究を行う。

II. 研究 1

1. 目的

高齢者が過去を語る頻度を測定する尺度を作成し, 過去の内容によって語る頻度に差があるかどうかを検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

A市内の高齢者教室(計3ヶ所)に通っている高齢者計101名(男性33名, 女性76名)のうち有効回答が得られた78名(男性19名, 女性59名), 平均年齢71.7歳(SD=6.64)のデータを分析に用いた。

(2) 調査時期と実施法

2003年12月。「自然に思い出される過去の出来事」について回答を求めた。質問紙法。集団で実施した。

(3) 質問紙

高齢者が普段, 過去の出来事をどの程度他者に語っているかに関して, 肯定的内容の過去を語る頻度を問う4項目と否定的内容の過去を語る頻度を問う5項目, 計9項目を筆者が独自に作成した。なお, 臨床家評定により全項目案の内容的妥当性が確認された。それぞれの項目に対して「全く話さない(1点)」「どちらかといえば話さない(2点)」「どちらともいえない(3点)」「どちらかといえば話す(4点)」「非常によく話す(5点)」の5件法で回答を求めた。

3. 結果と考察

因子分析(主成分法・バリマックス回転)の結果, 2因子が抽出された。因子間の内的整合性を示す Cronbach の α 係数はそれぞれ.81と.85となり, 各因子の信頼性が確認された(Table 1)。第1因子は「嫌な」「悔しく」「悲しい」などの否定的内容の過去の出来事を語る頻度を問う項目なので〈否定的な過去の出来事を語る頻度〉と名付けた。第2因子は「幸せに」「安らかな」などの肯定的内容の過去の出来事を語る頻度を問う項目なので〈肯定的な過去の出来事を語る頻度〉と名付けた。

また, 仮説1を検証するために〈肯定的な過去の出来事を語る頻度〉と〈否定的な過去の出来事を語る頻度〉

Table 1
過去の語り尺度の内容・因子負荷行列と開示得点平均値

項目番号と項目内容	第1因子	第2因子	共通性	回想開示得点平均値	因子間平均値
8 今考えても忘れられない嫌な出来事	0.892	-0.058	0.601	2.44(1.10)	
7 今でも悔しく思う過去の出来事	0.782	-0.077	0.425	2.55(1.05)	
6 思い出すと悲しい出来事	0.757	-0.064	0.466	2.50(0.95)	
5 思い出すと気分が沈む出来事	0.661	0.103	0.612	2.35(0.90)	
2 思い出すとつらい出来事	0.525	0.247	0.495	2.66(1.01)	2.50(1.00)
1 思い出すと幸せになる過去の出来事	-0.0419	0.789	0.543	3.53(0.90)	
4 思い出すと安らかな気分になる過去の出来事	-0.010	0.784	0.576	3.60(0.95)	
3 思い出すと心が満たされる過去の出来事	0.001	0.683	0.764	3.59(0.86)	
9 思い出すと楽しい過去の出来事	0.036	0.632	0.416	3.83(0.84)	3.64(0.89)
寄与	37.17%	17.27%			
累積寄与率 (%)		54.44%			

() 内は標準偏差

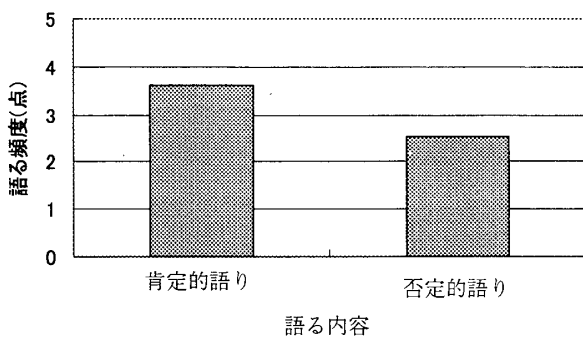


Fig.1 過去の語りの内容別頻度差

Table 2
過去の捉え方：肯定的回想尺度と否定的回想尺度の項目例

肯定的回想尺度の項目例

- 3 思い出は私にとってとても大切なものである。
- 6 昔のことを思い出すと、満足な気分になる。

否定的回想尺度の項目例

- 17 昔のことを思い出しても、あまりいい気分にならない。
- 19 過去を思い出すと気分が沈むことがある。

について得点平均値間でt検定を行った。その結果、2者間に有意な差は見られなかった[t(77)=10.71, n.s.](Fig. 1)。

結果から、仮説1は支持されず、肯定的な過去の出来事と否定的な過去の出来事で、語る頻度に有意な差は見られなかった。一般的に高齢者が過去を語る時、その内容が肯定的か、否定的であるかでその頻度に有意な差はないということがわかった。

III. 研究 2

1. 目的

過去の捉え方・人生満足度との関連から、高齢者にとっての「過去を語る」という行為について検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

A市内の高齢者教室(計3ヶ所)に通っている高齢者計101名(男性33名, 女性76名)のうち有効回答が得られた78名(男性19名, 女性59名), 平均年齢71.7歳(SD=6.64)のデータを分析に用いた。

(2) 調査時期と実施法

2003年12月。「自然に思い出される過去の出来事」について回答を求めた。質問紙法。集団で実施した。

(3) 質問紙

質問紙はフェイスシートを除いた41項目で、以下に示す4種類の内容から構成される。

- ①研究1で作成した過去を語る頻度測定尺度：高齢者

が過去の出来事を他者に語る頻度を測定する項目(9項目5件法)からなる。〈肯定的な過去の出来事を語る頻度〉と〈否定的な過去の出来事を語る頻度〉の2因子。

②過去の捉え方の測定：肯定的回想尺度と否定的回想尺度(野村・橋本, 2001)：過去をポジティブなものとして捉えている程度を測定する項目(14項目5件法)と、過去をネガティブなものとして捉えている程度を測定する項目(6項目5件法)からなる(Table 2)。

③人生満足度尺度(和田, 1981)：主観的な人生の満足度を測定する項目(13項目3件法)。

3. 結果と考察

(1) 過去を語ることに過去の捉え方の関連(仮説2検証)

①過去の語り尺度の〈肯定的な過去の出来事を語る頻度〉・〈否定的な過去の出来事を語る頻度〉と、肯定的回想尺度(過去=ポジティブと捉える程度)、否定的回想尺度(過去=ネガティブと捉える程度)の得点間で相関を見た。その結果、肯定的な過去の出来事を語る頻度と、過去を肯定的に捉える程度間にのみ正の相関($r=.36, p<.01$)が認められた(Table 3)。結果から、肯定的な過去の出来事を語る頻度と過去をポジティブに捉える程度に何らかの関連があることが示された。

②次に、①の結果をより詳しく検討するために過去の語りの内容別(〈肯定的な過去の出来事を語る頻度〉・〈否定的な過去の出来事を語る頻度〉)に肯定的語り高群(N=45)・低群(N=33)、否定的語り高群(N=38)・低群(N=40)に分け、「肯定的回想尺度」の過去をポジティブに捉える程度と「否定的回想尺度」の過去をネガティブに捉える程度の差に関してそれぞれt検定を行い、語りの内容と頻度によって過去の捉え方に差があるかを検討した。

その結果、肯定的語り高群と否定的語り高群では過去の捉え方に有意な差は見られなかった(それぞれ $t(44)=6.59, n.s., t(37)=5.71, n.s.$)が、肯定的語り低群と否定的語り低群では過去の捉え方に有意な差が見られた(それぞれ $t(32)=2.07, p<.05, t(39)=3.32, p<.01$) (Fig.2)。

③ここで、さらに詳しく肯定的な過去の語りと否定的な過去の語りの頻度の組み合わせによって過去の捉え方に差があるかどうかを見るために、語りの内容と頻度ごとに4群(肯定的語り高群×否定的語り高群(N=24)、肯定的語り高群×否定的語り低群(N=21)、肯定的語り低群×否定的語り高群(N=14)、肯定的語り低群×否定的語り低群(N=19))にわけ、過去をポジティブに捉える程度とネガティブに捉える程度の差に関してそれぞれt検定を行った。その結果、肯定的語り高群×否定的語り高群、肯定的語り高群×否定的語り低群、肯定的語り低群×否定的語り低群では過去の捉え方に有意な差は見られなかった(それぞれ $t(23)=4.64, n.s., t(20)=4.59, n.s., t(18)=0.75, n.s.$)が、肯定的語り低群×否定的語り高群では有意に過去をポジティブに捉えることがわかった($t(13)=3.26, p<.01$) (Fig.3)。

①の結果から、相関係数 $r=.356$ は高いとは言えないものの、肯定的な過去の出来事を語る頻度と過去をポジティブに捉える程度に何らかの関連がある可能性が示された。

Table 3
過去の語りと捉え方の相関

過去の語り 過去の捉え方	過去の語り	
	肯定的語り	否定的語り
過去=ポジティブ	0.356**	0.134
過去=ネガティブ	0.191	0.160

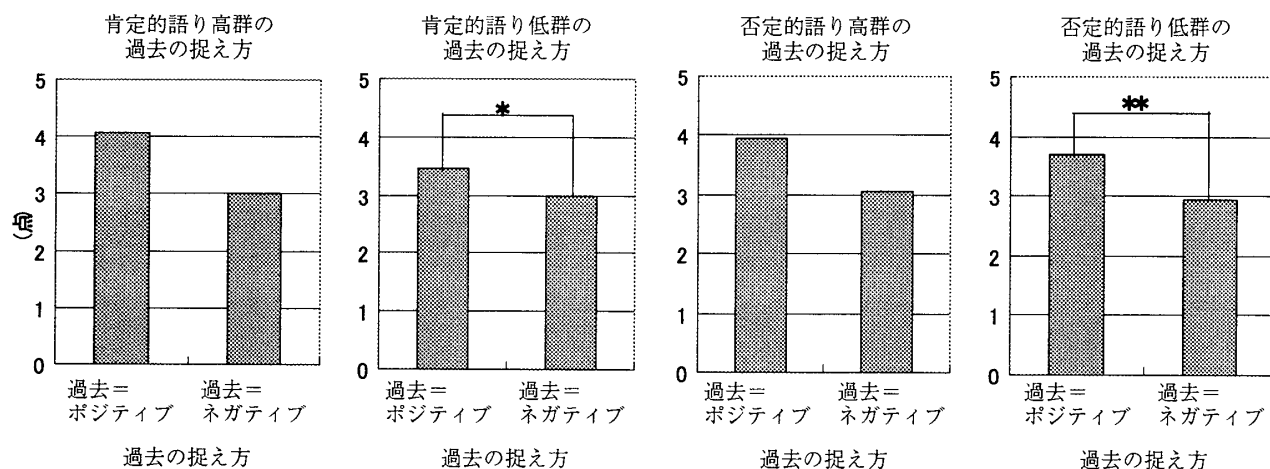


Fig.2 過去の語りの内容別・頻度別過去捉え方 1

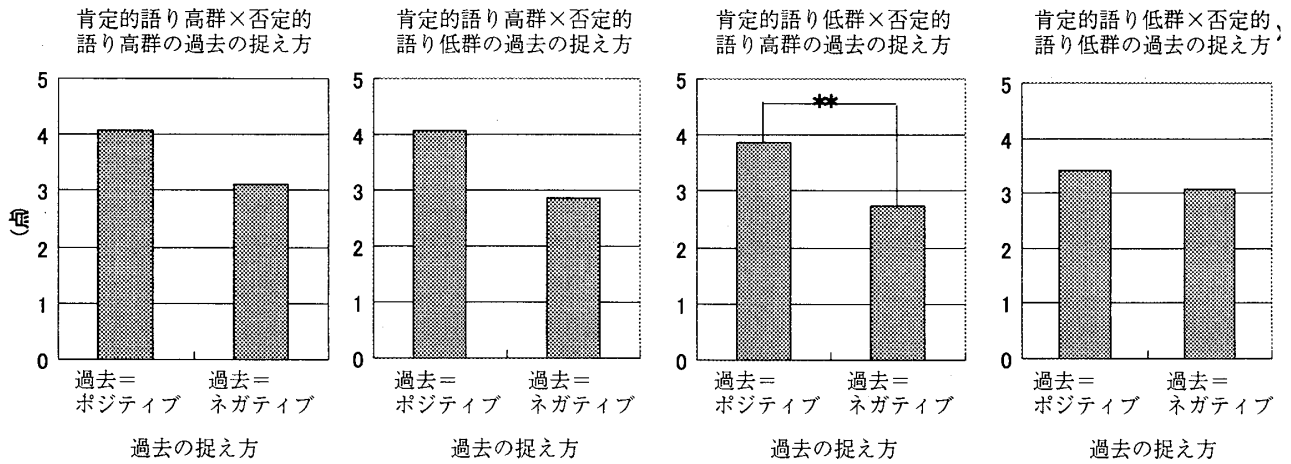


Fig.3 過去の語りの内容別・頻度別過去捉え方 2

また、②では肯定的語り低群と否定的語り低群のみ過去を有意にポジティブなものとして捉えているという結果が出た。つまり、肯定的な過去の出来事、否定的な過去の出来事どちらの場合も、語る頻度が少ない高齢者は過去を有意にポジティブに捉えているということがわかった。もしくは、過去をポジティブに捉えている高齢者は、その内容が肯定的であれ否定的であれ、過去の出来事を他者にあまり語らない、ということが示された。いずれにせよ、「過去を語る頻度が多い高齢者ほど過去を肯定的に捉える程度が大きいのではないだろうか」という仮説2が支持されない結果となった。

また、③からは、肯定的語り低群×否定的語り高群のみが有意に過去をポジティブに捉えているという結果となり、肯定的な過去の出来事を語る頻度が少なくても否定的な過去の出来事を語る頻度が多い高齢者は、過去を有意にポジティブに捉えているということが示された。

①～③から、過去をポジティブなものとして捉えている高齢者は、過去について語る頻度が少ない、もしくは、肯定的な過去について語る頻度は少ないが否定的な過去について語る頻度が多い、という傾向が示された。「過去を語る」ということは、自分を他者に開示し、相手からの反応、評価を受けるという意味も持つ。この結果から因果関係はわからないが、これまでの回想法研究(Butler, 1963; 長田・長田, 1994; 野村・橋本, 2001など)の「回想する」と同様に、もし「過去を語る」として過去をポジティブに捉えるようになっていく過程があるとすると、すでに過去をポジティブに捉えている高齢者は、もう過去を語ることをせず、自分の中に大切に抱えている傾向があるのかもしれない。もしくは、肯定的な過去の出来事はあえて語らず胸に留め、否定的な過去の出来事に関しては語ることで、他者に受け入れても

らう、評価してもらうなどの経験によって捉え直すきっかけとしている可能性も考えられる。

(2) 過去の捉え方と人生満足度との関連(仮説3検証)

①次に、仮説3を検証するために、過去の捉え方(「肯定的回想尺度」と「否定的回想尺度」の得点の合計)についてそれぞれ過去をポジティブに捉えている程度高群(N=40)・低群(N=38)、過去をネガティブに捉えている程度高群(N=39)・低群(N=39)に分け、人生満足度得点を従属変数として1要因分散分析を行った。その結果、仮説3は支持され、過去をポジティブに捉える程度高群は低群よりも有意に人生満足度得点が高く[F(1,77)=9.48, $p<.01$]、過去をネガティブに捉える程度低群は高群よりも有意に人生満足度得点が高かった[F(1,77)=4.74, $p<.01$] (Fig.4)。

②さらに詳しく、過去をポジティブに捉える程度とネガティブに捉える程度の組み合わせによって人生満足度に差があるかどうかを見るために、過去の捉え方によって4群(過去をポジティブに捉えている程度高群×ネガティブに捉えている程度高群(N=20)、過去をポジティブに捉えている程度高群×ネガティブに捉えている程度低群(N=20)、過去をポジティブに捉える程度低群×ネガティブに捉える程度高群(N=19)、過去をポジティブに捉えている程度低群×ネガティブに捉えている程度低群(N=19)にわけ、人生満足度得点を従属変数として1要因分散分析を行った。その結果、4群間に差が見られた[F(3,74)=4.58, $p<.01$]。また、多重比較(TukeyのHSD)の結果、過去をポジティブに捉えている程度高群×ネガティブに捉えている程度低群、過去をポジティブに捉えている程度低群×過去をネガティブに捉えている程度高群間にのみ有意な差が見られた(MSe=4.47, p

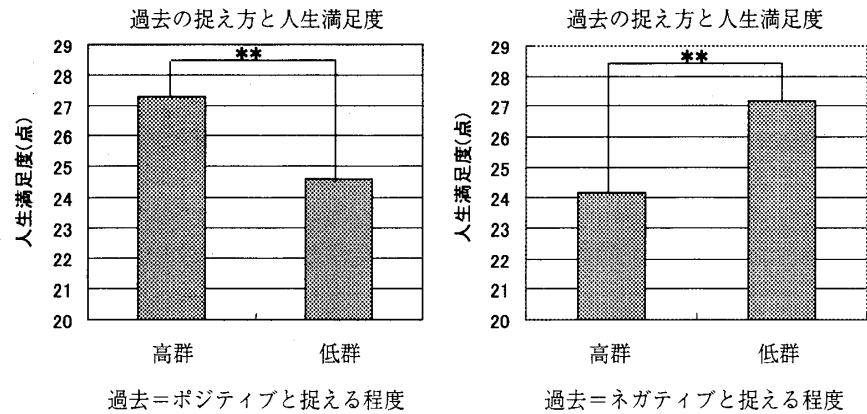


Fig.4 過去の捉え方と人生満足度 1

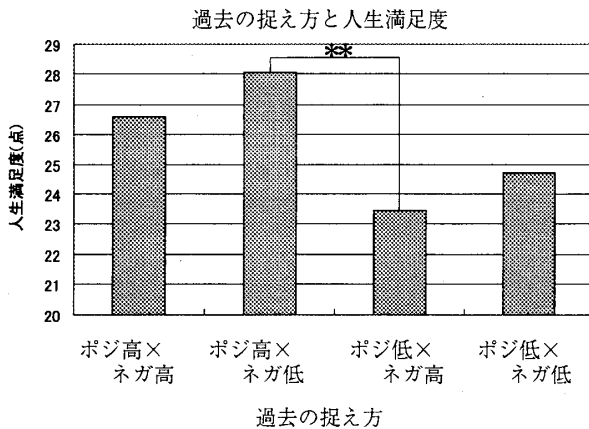


Fig.5 過去の捉え方と人生満足度 2

<.01) (Fig.5)。

①の結果から、過去をポジティブに捉えている程度とネガティブに捉えている程度それぞれにおいて、人生満足度に有意な差があることが示された。このことから、過去をどう捉えているかということが、人生全体に対する満足度と関連していることが示され、現在の高齢者の心理的適応を考える上でも、過去をどう捉えているか、どう受け止めているかを考慮する必要があるということが示されたと言えるだろう。また、②の結果から、過去をポジティブ、ネガティブ両方の側面から捉えた場合は、過去を一方向的にポジティブなものとして捉えている高齢者とネガティブなものとして捉えている高齢者間のみに差が見られたが、その他の群間に差が見られなかった。このことから、たとえ過去をポジティブ、またはネガティブなものとして捉える程度に差はあったとしても、両面の過去に対する思いが複合することで、一面から過去を捉えた場合と人生全体に対する満足度が異なってく

るといことが考えられる。

IV. 総合考察

本研究では、高齢者が語る過去について内容と頻度を測定する尺度を作成し、過去を語るということと、過去の捉え方、人生満足度との関連を検討した。

研究1で高齢者がどのような過去の出来事を、どのような頻度で他者に語っているかについて問う尺度を作成した結果、肯定的な過去の出来事も、否定的な過去の出来事も、語る頻度に差が見られないという結果が示された。普段高齢者が語る過去の出来事は、肯定的な内容、否定的な内容とも同じように語られていることがわかった。ただし、ここで尺度作成における反省点として、項目の過去の出来事が、当時から見て肯定的・もしくは否定的な出来事であったのか、現在から見て肯定的・否定的な出来事であったのかが明確に区別されていないということが指摘される。当時も良く、今振り返っても良い思い出なのか、当時は嫌だったけど、今振り返るといい思い出なのか、同じ「いい思い出」でも、その時期によって捉え方が異なる可能性がある。その点を区別せずに調査を行ったことで、「肯定的な過去の出来事」と「否定的な過去の出来事」の境界が曖昧となり、結果にも影響が出た可能性もある。そのため、この問題点を指摘した上で、以下の考察も続けたいと思う。

また、研究2-(1)では過去の語りと過去の捉え方の関連について、様々な可能性が考えられた。大きく肯定的な過去の出来事と否定的な過去の出来事に分けると、それぞれ語る頻度が少ない方が過去をポジティブに捉えているという結果が出たが、これは「語らないこと」が過去をポジティブに捉えるために良いというのではなく、過去をポジティブに捉えている高齢者の、語りの特徴を

示していると考えてよいだろう。つまり、過去をポジティブに捉えている高齢者はあえて過去の出来事を語ることはしないのかもしれない。また、細かく見て肯定的語り低群×否定的語り高群が過去をポジティブに捉えているという結果からは、過去をポジティブに捉えている高齢者のもう一つの傾向として、肯定的な過去の出来事はあえて語らずとも、否定的な過去の出来事は多く語っていることが示されている。このことから、否定的な過去の出来事に関しては、語ることで他者に受け入れてもらう、評価してもらうなどの経験を通じ、過去をポジティブに捉え直すきっかけとしている可能性も考えられる。

研究2-(2)の過去の捉え方と人生満足度の関連については仮説を指示する結果が示され、過去をポジティブに捉える程度が高い、もしくはネガティブに捉える程度が低いほど人生満足度が高いということがわかった。この結果から、過去の捉え方が人生満足度と関連していることがわかり、高齢者の現在の心理的な適応を考える上で、過去をどう捉えているか、どう受け止めているかとの関連を考慮する意義が示されたと言えるだろう。また、それに加えポジティブ、ネガティブの両面から過去を捉え、組み合わせによって人生満足度を比較したときに、人生満足度に見られる差が少なくなるということが示された。この結果から、高齢者の過去の捉え方と人生満足度の関連を見る際、過去を一面的なものとして捉えるのではなく、総合的なものとして見ていくことの必要性が考えられた。

V. 今後の課題

今後の課題として以下の3点を挙げる。

① 具体的、質的に過去を扱う

今回、過去の出来事を「肯定的」「否定的」の大きく2つにわけてその語りについて調査を行った。しかし、肯定的な過去の出来事、否定的な過去の出来事と一口に言ってもその内容は様々で、具体的な内容によって語る頻度やその捉え方は同じではないだろう。また、前述したようにその出来事を当時どう捉えていたかということと、現在どう捉えているかということの違いも慎重に考慮する必要がある。今後、語られる過去の出来事をより具体的に、丁寧に捉えていく必要があると思われる。また、過去の語りや捉え方、人生に対する満足度を見る上で、個人差の影響がとても大きく、個人個人の過去について丁寧にみていく必要があるだろう。今回のような質問紙調査では汲み取れない過去への思いや「語る」という意味を、高齢者一人一人の面接で個別に丁寧に検討していきたい。

② 両面的、多面的に過去を扱う

過去の捉え方に関しても、過去をポジティブ、または

ネガティブと一面的に捉えると考えるのではなく、「ポジティブでもネガティブでもあるもの」と両面的に捉えるという視点も含めて考える必要があると言えよう。研究2-(2)で示されたように、過去をポジティブ、もしくはネガティブなものとして一面的に捉えた結果と、両側面から捉えた結果では、人生満足度に違いが見られた。過去をポジティブに捉えるから良い、ネガティブに捉えるから良くないと捉えるのではなく、誰にとってもいい過去、嫌な過去があり、それらを総合してその人にとっての「過去」となる。回想や過去の語りの効果を考える上でも、回想や語りを行った結果、過去をポジティブなものとして捉えるようになれば良いというものではなく、過去を「ポジティブでもあり、ネガティブでもあるもの」として捉えられるようになるということもまた、高齢者にとっての大切な目標となるのかもしれない。

③ 過去を語る対象の考慮

さらに、語る対象をきちんと考慮する必要があると思われる。今回、「普段自然に思い出される過去の出来事」について、「誰に」という語る対象を限定せずに、語る頻度についてのみ調査を行った。菅沼(1997)は高齢者の自己開示に関する研究の中で、自尊心が高い高齢者は、過去の経験や肯定的な事柄を親密な他者に多く開示して更なる自尊感情の向上を図る一方で、内面性の高い喪失経験に基づく悩みを親密後の低い他者に開示しないことにより、評価低減を回避して自尊感情を保持しようとする傾向があると述べている。このように、語る内容によって、語る対象も異なり、それによって「語る」という意味も異なってくる。よって、語る対象を考慮したうえで、過去を語るという意味や効果を丁寧にみていく必要があるだろう。

これらの課題を踏まえ、今後、高齢者が過去を語ることの意味を、多面的に検討していきたい。

謝辞

本論文をまとめるにあたり、ご指導をいただきました九州大学大学院人間環境学研究院教授野島一彦先生には深く感謝いたします。また、お忙しい中貴重なご意見をいただきました同教授針塚進先生にも心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

引用文献

- Butler, R.N. 1963 The life review : An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*. 26, 65-75.
 河田政之・吉村容正・山田達夫・旭 俊臣・渡辺晶子・野村豊子・服部孝道 1998 痴呆に対するデイケア, 回想法の効果 老年精神医学研究, 9(8), 943-948.

- 黒川由紀子 1995 老年期における精神療法の効果評価
— 回想法をめぐって — 老年精神医学雑誌, 6(3),
315-329.
- 松田 修・黒川由紀子・斉藤正彦・丸山 香 2002 回
想法を中心とした痴呆性高齢者に対する集団心理療
法 心理臨床学研究, 19(6), 566-577.
- 長島紀一 1977 性格の円熟と退行 加藤正明・湯沢靖
彦・清水 信(編) 老年期 東京:有斐閣 Pp.79-
93.
- 長田由紀子・長田久雄 1994 高齢者の回想と適応に関
する研究 発達心理学研究, 5, 1-10.
- 野村信威・橋本 幸 2001 老年期における回想の質と
適応の関連 発達心理学研究, 12(2), 75-86.
- 菅沼真樹 1997 老年期の自己開示と自尊感情 教育心
理学研究, 45(4), 378-387.
- 和田修一 1981 人生満足度尺度の分析 社会老年学,
14, 21-35.